近江八景：三井晩鐘（みいのばんしょう）

長良山の麓にある三井寺は、大津で最も古い仏教寺院の一つです。三井寺は動乱の歴史を持ち、何度も焼失していますが、その度に再建を繰り返しています。三井寺には多くの重要文化財がありますが、晩鐘（ばんしょう）はその一つです。 日本三名鐘の一つとされ、その音色に惹かれて、近江八景の一つの題材にもなっています。

歌川広重（1797～1858）をはじめとする木版画家たちは、鐘そのものを描くのではなく、遠くから境内を描き、谷間に鳴り響く鐘の音を連想させるように描きました。広重の版元である保永堂版では、寺院そのものよりも手前の農地や遠くの山々がより目立っています。

現在は農地の代わりにお店や家々が建ち並んでいますが、それ以上に当時との違いが目立つのが琵琶湖運河の存在です。広重が版画を制作してから半世紀後に掘られたもので、山の下を穿ったトンネルなどの水路で、大津と京都を結んでいます。運河やお寺に続く道沿いには、たくさんの桜の木が立ち並び、春には近隣を鮮やかなピンク色に染め上げます。